新連載 vol.1

風につたへし

「その風を得て、心より心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名づく」（世阿弥）。
――水のような清らかな心で、遺風に想いを馳せ、そして新風を試みながら。
新鋭書家が日々の中で“気づき”を綴る、連載エッセイ。

茶室用の扁額作り①
自然の恵みを活かすもの

文／木下真理子

夏のあいだ、部屋の中を素足で過ごした。

書作で使っている仕事場には、全室に渡ってアイボリーのフローリングが敷き詰められている。素足で床板の上を歩きまわると、ヒンヤリとして気持ちがいい。足の裏で木の感触を愉しんでいるうちに、心は解放されてゆく。

バブル経済に沸いた頃、インテリア雑誌などではモノトーンや無機質といったキーワードが流行して、みんな夢中になって最先端を求めた。

ところが、景気が下降線をたどり始めた頃から、優しさや温かみを求めるように、古くからあるものや天然由来のものが尊ばれるようになった。

一過性の流行で大切なものを見失うより、まさに木のように、年月をかけて育まれてゆく豊かさへ、人々の関心は向かっていった。

これから季節は秋めいて、街路樹の葉は赤く色づき、黄色に輝いたりもして、その後はらはらと風に舞う。

木は、生きとし生けるものの命の美しさを気づかせてくれる。

年輪を見れば、その木の樹齢が分かる。この事実にきっと誰もが一度は興味を抱く。

年輪は、一年で一周ずつ同心円状の輪を形成する。成長が進む春から夏は、細胞が大きく形成されるので、輪の目幅は広く白くなる。成長が鈍い秋から冬は、細胞が緻密に形成されて、間隔は狭く茶褐色になる。だから一年中、常に成長し続けるアフリカや東南アジアなどの熱帯地域の木には、ほとんど年輪は見られない。

台風に見舞われたり、周囲の大木で日光が遮られても輪は狭くなる。けれども間伐され、陽を充分に浴びて栄養豊富になれば広くなる。

見た目の通り、「レコード」そのもので、その木がこれまでどんなふうに生きてきたのか、気候や場所など過去の生育環境の変化が一年の狂いもなく記録されている。

そして神秘的とも言えるこの年輪を、そのまま〝縦割り〟にすると、私たちが普段目にしている「木目」の美しい縞模様が現れる。一つひとつ、育った条件は違うから、人間もそうであるように、同じ木目は二つと存在しない。

こんな木の特質を活かして、茶室の「扁額」が作られる。それに用いる書のご依頼を頂いた。書を「刻字」にしたいというご意向だった。

刻字には、〝カツラ〟という木がよく使用される。今回、私の書を刻し

て頂くことになった中川游人先生に、そのカツラの調達では知る人ぞ知る、岡本木工所を紹介して頂いた。重要文化財の仏像修復に必要な木の調達もされているとのこと。

お電話をさせて頂くと、「木味（きあじ）（色調や木目、性質）は直接見ないと分からないから、ご自身の目でご覧になって下さい」ということで、埼玉県の北本にある工場へ伺った。

工場といっても、案内して頂いて足を踏み入れたその空間は、窓から優しい陽の光が入り、木の香りがふぁっと漂っていて、何だか心地いい。

ゆっくり一つひとつ見せて頂きながら、代表の岡本さんといろいろなお話をさせて頂いた。

南は亜熱帯、北は亜寒帯という南北にのびる地形によって、日本列島には多様な樹木が生息し、実に国土の約六十七パーセントが森林とのこと。

そう言えば、太古の日本には、森羅万象に精霊が宿るという民族信仰もあって、人々は御神木として木を崇めてもきた。古の時代から、日本人は森の国に暮らしているという自覚を持っている。

近代以降は商用を目的として、針葉樹であるヒノキやスギなどが過剰に植えられるようになった。それなのに安い輸入材が入ってくると、供給の多くはそれでまかなわれて、植樹の森は放置されてきた。

木々がひしめき合って、荒れ放題。

この由々しき事態に気づき、森林の手入れが始められた。近年は間伐材を活用していく動きもある。

岡本さんにお勧め頂いたのは、北海道の空知川沿いに広がる、約二万三〇〇〇ヘクタールにも及ぶ「東大富良野演習林」という森の中の一木から採られたもの。この東大演習林は、原生林に近い状態で、木にとってはとても生育環境が良いらしい。エゾマツやトドマツといった針葉樹と、ナラやカエデ、カツラなどの広葉樹が混交した亜寒帯の森で、あの縄文杉で有名な屋久島や、常緑樹とマングローブで覆われる西表（いりおもて）島の森と並び称されているそうだ。

森にもブランドという言い方が適当なのかどうかはさておき、〝東大〟と名の付く森の木にふさわしいと、お墨付きを頂いた。

原木は、その木の特質や使用目的に応じて製材され、丁寧に乾燥が施される。自然乾燥の場合には、何年もかけてそれが行われる。

3

4

5

1. 扁額制作のために今回製材されたカツラ　2. 夏の東京大学北海道演習林　3. 立ち上がる木の香りと柔らかな光に満ちた岡本木工所　4. 運搬車の一番下が原木。アルバムは木の長い旅路を語る　5. 静かな空間の中で木は次の生を待つ
写真／2. 伊東宏樹（国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 北海道支所）、他はすべて木下真理子撮影

私は手で木肌を確かめながら、表面にほんの小さな〝節〟が残っていることに気が付いた。これは〝無垢〟の証になるから活かした方がいいと岡本さん。

それで製材される前の原木の写真があると言って、工場に隣接する事務所から持って来てくださった。岡本さんは、入手した木の写真をその都度撮影し、アルバムに入れて保存している。アルバムの写真には、几帳面な字で〝平成二十四年三月〟の日付と、分かり易いように矢印も書き込まれている。運搬車のここに乗っているのがこの木でね、と説明してくださった。木へ注ぐ愛情が、ひしひしと伝わってくる。

きっとここにある木は、年輪に記録された時間を経て、遠くから旅をしてきたのだろう。

倒れて、地中に長い年月埋まったままになっている木を掘り起こすこともあるという。このような木は、表面を研削すると、木の中に蓄積されていた地下水の成分が空気と触れ合って、色合いがスゥーと変化していくそうだ。実物を見せて頂いた。表面に薄（うすう）らと青黒味が入っていて、熟成したワインではないけれど、独特の風合いを持っている。

私はすっかり木の虜になってしまった。

岡本さんから「茶室の向きはどうなるのか」と訊ねられた。方角を気にされている。なぜ？と首をかしげる私。

木は、根に近い部分を元口（もとくち）、枝に近い部分を末口（すえくち）と呼び、方角や上と下に合わせて、設置する向きが決まっているという。元口を北か西、末口を南か東に向けるようにして使う。しかるに木で家を建てる時には、元口の方を下（地面側）にして建てることが、木を扱う人たちの古からの言い伝えとなっているとのこと。

そうか、人だって逆立ちしたままでは生きてはいけない。

木は生きている。科学的な根拠は無いかもしれないけれど、こんなふうに自然の摂理に従うことは、きっと理にかなっている。

「活かす」ことは、〝生かす〟ことなのだと改めて思う。

木下真理子（きのした・まりこ）　雅号は秀翠。大東文化大学卒業。高木聖雨に師事。映画『利休にたずねよ』、NHK『にっぽんプレミアム』などの題字を手掛け、「日経ビジネスオンライン」の連載も持つ。伝統文化としての書の魅力を現代的なアプローチにより伝える『日本の美しい文字プロジェクト』も国内外で展開中